

純粹に、作品世界と対峙する

土田英生

選考会に臨む前、私が推していた順番に選評を書かせていただく。私は作品を読んでいる時、作者の企みがあからさまに顔を見せると冷めてしまう。自分も書き手だからかもしれない。近親憎悪というか、作者の自意識を感じたくない。いかに純粹に作品世界と対峙させてもらえるかが自分の中では大切な評価基準だ。

その点で私はキタモトマサヤさんの『灯灯ふらふら～the light is still blinking～』が良かったと思った。とても素直に読みおわり心を動かされた。作者がこの作品を書く上で「嘘をついていない」と思えた。一人の男、タカシがブランコに腰掛けている。そこに次々と幼い頃を共に過ごした人たちが現れて過去についての会話を交わしていく。実感のこもったエピソードが続き、主人公の人生と衰退していく共同体の終焉が見事に描き出される。ブランコから立ち上がるタカシ、つまり彼の人生が終わる時、共に人生を体験したと感じられた。気になった点はクロスによる説明の多さ、もう一つはサトルやコウジといった男性登場人物の鮮やかな描き方に比して、他の女性の登場人物が主人公にとってのイメージの中だけに留まってしまっていることだった。

大賞受賞となった武田操美さんの『みえない』は、構造を解き明かそうと論理として追っていくと混乱してしまう面がある。展開に軋みもあった。ただ、それでも最後まで納得して読めちゃう不思議な作品だった。作品の中でも夢は重要な要素として出てくるが、この作品自体が夢なのではないかと思う。夢は心の抑圧によって歪曲や飛躍が行われる、見ている間はリアルに感情も動くが、目が覚めてから冷静に考えるとその世界の理不尽に気づくものだ。この作品を読んでいる間、私も夢を一緒に見ている気にさせられた。

筒井加寿子さん『ヒロインの仕事』。台詞も上手いし展開も面白かった。登場人物それぞれが面白く造形されていて、ドラマとして力もあった。漫画に対する結月のモチベーションは演劇に携わる私たちにも通じていて考えさせられる。惜しむらくは後半だ。ドラマが突然急ぎ足になり、特に桜子と大和に関してはもう二シーンほど足りない気がする。

中村ケンシさん『コクゴのジカン』。消えゆく地方百貨店の日々を、大上段からではなく違ったポジションで働く人々から描いている。展開される会話は手練れていて申し分ない。それでも私が最後まで引っかかってしまったのは久我とのシーンで出てくる佐々木先生のことだった。彼女は東北に行って震災で亡くなったことがうかがえる。そして久我の言葉から東日本大震災での大川小学校の悲劇を連想してしまう。もしも、そのことを題材に使ったのであれば、納得できる形で関連を描いて欲しいと思った。作者の心の内には想いもあったのだろうが、今の書き方だと受け手に「意味あり気なドラマの気配」を与えるだけに留まってしまう。実際に起こった悲劇や事件を、特に生々しく記憶が残る事象を扱う時には、そのものの持つ事態の重さをドラマに使うべきではない。もしかしたら全く関係ない可能性もあるが、私にはその点がどうしても気になってしまった。

佳作受賞の坂本涼平さん『さよならの食卓』は描かれている世界が興味深かった。現在、まさに私たちがその時代の変化の岐路に立たされている題材に果敢に挑んでいる。ただ、作劇の技術に関しては足りないところが多い。劇世界を構築するための道具立てにも物足りさがあったし、事情の提出の仕方が説明的で、展開にご都合主義な点が見られる。

伊地知克介さんの『月と首長竜』にも似た感想を持った。この作品も設定は風変わり興味深い。ただ、芝居の長さのわりにオープニングが長かったり、会話として流れていなかったりする部分もあり、芝居が立ち上がりきれいなものどかしさを感じた。

最後になりましたが、武田操美さん、坂本涼平さん、おめでとうございます！